

国内研修事後報告書

2017年2月6日より2泊3日で私の所属している関谷ゼミのメンバーたちと国内研修として、神戸、京都へ行って来た。研修内容としては、2日目に京都市のNPO法人子どもの心理療法支援会、“サポチル”への訪問と3日目に神戸市の阪神淡路大震災記念として設立された“人と防災未来センター”の見学であった。計画時の主な目的としては、“サポチル”の訪問で私たちの住んでいる関東の支援を必要とする子供達への施設や実際の支援状況の現実と比べて関西地方に何か充実さや考え方の違いなどはあるのか、また実際に支援を行なっている立場の方の話聞くことであった。実際に研修を終えて、考えさせられる研修になったと感じている。まずはこれら2つの研修先での内容を述べていこうと思う。

まず、2日目に訪問したサポチルはNPO法人子どもの心理療法支援会が設立し、運営を行なっている。子どもの心理療法支援会の活動は2005年4月に発足し、2005年10月にNPO法人として認証を受けた。活動の主な目的としては、子どもたちが心理療法、心のケアを受けられるように支援すること、そして専門性の高いセラピスト育成の場を提供することの二つである。理事長であり、NPO法人設立の発案者である平井正三さんは、子どもの精神分析的な心理療法を学ぶために英国に留学した際、子どもたちの心の支援に関する制度の充実さ、日本との違いを感じたと言う。そこは心の問題を抱えている子どもたちが無料で心理療法を受けられる制度が確立しており、経済的にも社会的にも不利な立場である多くの子供達はその恩恵を受けていたと言う。そんな英国と比較すると日本は子どものニーズや援助者の熱意よりも、機関そのものの論理が優先されていると感じたことがこのNPO法人の設立のきっかけであると述べられていた。具体的には、発達障害児や被虐待児などの専門家の心理療法を必要とする子どもたちへの週1回の心理療法を、継続して受けられるよう、それに必要な費用の援助を行っている。また、人材育成事業として、子どもの心理療法に歴史をもつ英国の公的機関（ナショナルトラスト）のタビストッククリニックで行われているトレーニングプログラムを参考にしながら、子どもの心理的援助に関して体型的に、かつ、集中的に学べる人材育成プログラムを構築し、2005年10月よりスタートさせている。通年6回の「京都精神分析・臨床セミナー」と、より専門性を追求する少人数の「研修プログラム」と、テーマを明確にした1日研修「ワークショップ」の3種類の人材育成プログラムを提供し、高い専門性を備えたセラピストの育成を進めている。また、ボランティア会員を募集しており、児童養護施設の子どもを、施設から心理療法機関まで連れて行き、50分のセラピーが終わったら、また施設まで連れて帰るという仕事を任している。そして今回、私たちはサポチルの理事長である平井正三さんにアポイントメントをとって、お話を伺うことができた。平井さんは、このNPO法人を発案してから、実際に設立するまでにあたり、平井さんの研究グループのメンバーと一緒に動いてきた。公的機関を通すとど

うしてもそちらの都合に寄っていってしまうとやはりおっしやっていた。また、途中プレセラピーで実際に使用しているおもちゃを持ってきて見せていただいた。怪獣などのマスコットがあり、虐待を受けていた子どもたちは特に乱暴に遊ぶという話を聞いて、幼少期の子どもたちだと、特に男の子は虐待を受けていなくても、そのようなマスコットで戦いごっこや乱暴な遊びをすると思うが、と質問してみたところ、平井さんは、実際に虐待を受けている子どもたちは受けていない子どもたちとは比にならないほど、乱暴に扱い、ひどい遊び方をするのですぐにわかるとおっしやっていた。また、女の子でもそのように遊ぶ子がいるという。私は、プレイセラピーについて詳しく勉強したことはないが、子どもだからこそ自分の中の感情、傷ついた心の内を言葉よりおもちゃで表現することができると思ひ、少しプレイセラピーに興味をもった。また、現代の子どもに多く見られるものとして、自閉症スペクトラムの話にもなった。診断基準が広がったこともあり、現代社会を生きる子どもたちの中で昔と比べて多くなってきているのが事実である。米国国立衛生研究所によると3歳から17歳の自閉症スペクトラムの有病率は、2014年に2.24%と示している。これは10年前と比べると3倍近い数値であった。日本の子どもたちのデータは信頼ある数値が見つからなかったが日本の有病率も増えてきていることは十分予測できる。自閉症スペクトラムについての話は、特に東大生に多いよね、ということや簡単な症状、特徴などの簡単な会話程度ではあったが、後からもう一度考えてみると、実際に養護施設にいる子どもたちや、虐待をうけて心の傷をおった子どもたちより私たちが普段生活をしている上で出会う、または関わりを持つ機会はこの先も多いように思える。そこで今までは、虐待を受ける子どもたちの支援や、ケア、治療という視点で勉強することが多かったが、ひとつ、人との関わり方についても考えるきっかけとなった。

次に最終日に訪問した神戸市の人と防災未来センターについて述べていく。人と防災未来センターは、国の支援を得て、2002年4月に兵庫県が設置し、公益財団法人ひょうご震災記念21世紀研究機構が運営を行っている施設である。阪神・淡路大震災の経験を語り継ぎ、その教訓を未来に生かすことを通じて、災害文化の形成、地域防災力の向上、防災政策の開発支援を図り、安心安全な市民協働・減災社会の実現に貢献することを目的としている。施設に入ると館内のスタッフが4階の1.17シアターに案内してくれるところから始まる。そこで私たちは実際に、当時の震災の凄まじさを大型映像と音響で体験した。一瞬にして街が崩れていく様子をリアルに体感し、非常に緊張と恐怖を感じた。そのあと震災直後の街を再現している道を通り、大震災ホールにて復興に至るまでのまちと人を直面する課題とともにドラマにて鑑賞した。この4階にいる間、私たちは終始寡黙しており、緊張の雰囲気があったと思う。3階におりるとそこは震災の記録フロアであり、震災関係の資料を実際に提供してくれた方々のコメント付きで展示してあった。想像以上の資料のリアリティさに一つ一つ見ても全然飽きなくむしろ時間を忘れてその当時の恐ろしさやどうしようもない現実や苦しみを発見していくことに夢中だっ

た。そのように私が夢中で資料を見ていた時、あるスタッフに声をかけられた。閉館時間まで30分を切っており、その方は、大切なのは震災の記録よりもあなたたち自身がこの先どう震災に対応していくかということ、そのために2階に降りて防災フロアを見て欲しい。ということ言われた。また、印象に残っているのはこれからいろいろな科学技術が整って現代でも地震予測技術は発達しているが、それよりも自分自身で自然の変化を感じなさい、と言われたことである。毎日外を歩いていれば、空を見ていれば、鳥をみていれば、自然を感じていれば何かしらの変化に気付けるようになる、と。その変化こそが地震の合図である、とおっしゃっていた。科学技術に頼り、歩きスマホが問題になるくらいの現代の人々の生活を改めて見直していかなければならない、そして私自身、それを他人事にせず改めて行こう、と強く思った。

今回、この京都・神戸国内研修を通して、新たに人との関わり方、特に自閉症スペクトラムのように身近に関わる機会の多いと考えられる人との関わり方に興味を持ち、また震災への備え方を学ぶことができた。去年一年間似ているテーマに興味を持つゼミメンバーとプレゼン、ディスカッションをしてきたが、これから始まる3年次に向けてこれらを忘れずにさらに深まった勉強、ディスカッションがしていけるよう努力していきたいと思う。さらに実際に実習を通して人との関わり方について考え、勉強していきたいと思った。